

職員研修計画

研修主題 「主体的に取り組む中で、他と協働しながら深く学び合う児童生徒の育成」
～思考力・判断力・表現力の育成を目指して～

1 主題設定の理由

(1) 児童生徒の実態と過去の研究から

本校の児童生徒の実態として、英国にある日本人学校という特殊性から、転出入児童生徒が多く、それぞれの出身地も多岐に渡っており、育ってきた文化や環境が異なる。そのため、多様な文化や他者に対して寛容で、優しい気持ちが育っている子どもが多い。また、家庭的に恵まれている児童生徒が多く、教師が言ったことを素直に受けとめ、実行できる子どもが多い。児童生徒の学力については、NRT（学力検査）の結果からも分かるように、各学年・各教科ともに概ね平均を超えている状況である。

つまり、本校の児童生徒は、基礎的な学力がついており、言われたことに素直に行動できる子どもが多いと言える。

令和元年度における本校の研修は、英国の教育現場で取り組まれているLGBTへの理解を図る教育にも取り組み、児童生徒の発達段階に応じて進めていった。その研修は引き継ぎながらも、ロンドン日本人学校では、3年間で1つのくりとして主題を設定して進めているため、3年間の研修の初年度にあたる令和2年度は、新たな研修主題を設定することとなる。

(2) 今日的な教育課題から

まず、社会的背景として、児童生徒が成人して社会で活躍する頃には、生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会や職業の在り方そのものが大きく変化する可能性がある。つまり、他者と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、価値の創造に挑み、未来を切り拓いていく力が必要である。

このような力をつけていくために、新しい学習指導要領では、各教科等において、以下の3つの資質・能力を育成することとされた。

- ・実際の社会や社会の中で生きて働く「知識及び技能」
- ・未知の状況にも対応できる「思考力、判断力、表現力等」
- ・学んだことを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力、人間力等」

これら3つの資質を育成するために、「主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）の視点からの授業改善」と「カリキュラム・マネジメント」（学校の教育計画のこと。つまり、どのような教育課程を編成し、どのようにそれを実施・評価し改善していくのかを考え、計画・実践すること）。の充実が求められている。

児童生徒の実態と、社会的背景・新学習指導要領の方向性を踏まえ、今年度の研修主題を「主体的に取り組む中で、他と協働しながら深く学び合う児童生徒の育成」とした。また、サブタイトルとして、～思考力・判断力・表現力の育成を目指して～とし、3つの資質の内、特に思考力・判断力・表現力の育成を重視していく。

(3) 目指す児童生徒像

① 「主体的に取り組む」児童生徒とは

「主体的に取り組む」児童生徒とは、具体的には、児童生徒自身が目あて（目標）を理解し、見通しをもって進んで活動に取り組むということである。そのためには、まず「目標が明確であること。」「目標と活動が一致しており、目標が児童生徒の実態に合っていること。」「児童生徒と目あてを共有できていること。」などが大切になってくる。また、児童生徒にとって、興味・関心のあるもの、必然性のある課題を設定することで、「やってみたい。」「取り組んでみたい。」という気持ちをもた

せることも、主体的に取り組むことにつながってくる。イギリスというこの地ならではの課題を設定することも、意欲をかきたてることにつながるだろう。

② 「他と協働しながら深く学び合う」児童生徒とは

「他と協働しながら深く学び合う」児童生徒とは、具体的には、児童生徒が思考し、判断する場面で、言語活動や体験活動等を通し、互いに協働しながら深く学び合うということである。そのためには、まず児童生徒自身が考え・判断する場面が授業内にあり、「なぜ」「どうして」という疑問をもって互いに追究し合うことが大切である。一人学び、グループ、一斉というように学習形態を工夫することで、対話を通して深く学び合うことや、思考・判断したことを表現する活動（話す・書く・描く・演奏する・歌う・発表する等）を工夫することも大切である。評価にあたっては、思考・判断のプロセスの結果、表現されたものを見て、児童生徒がどのように思考し・判断したのかというプロセスを正しく見取ること、その見取ったことを授業改善に役立てることも「カリキュラム・マネジメント」の視点において重要である。

2 研修の仮説

児童生徒が学習活動を通し、課題追究・解決のために主体的に取り組む、他と協働しながら深く学び合うことで、思考力・判断力・表現力の育成を図ることができるだろう。

3 研修の具体的構想

(1) 研修検証のための具体的方途

仮説を具現化するために次の以下手立てを講じ研修に取り組む。

① 主体的に取り組むための手立て

- ・ 目標を明確にする。
- ・ 児童生徒の実態と教科の目標から、児童生徒の実態に合った目標を設定する。
- ・ 目標と活動と評価を一致させる。
- ・ 児童生徒と目あて（目標）を共有する。
- ・ 児童生徒にとって、興味・関心のあるもの、必然性のある課題を設定することで、児童生徒に「やってみたい」「取り組んでみたい」という気持ちをもたせる。（例えば、イギリスというこの地ならではの課題を設定するなどの工夫をする）。

② 他と協働しながら深く学び合うための手立て

- ・ 児童生徒自身が思考し・判断する場面に授業内に設定し、「なぜ」「どうして」という疑問をもって互いに追究し合えるようにする。
- ・ 一人学び、グループ、一斉というように学習形態を工夫することで、対話を通して深く学び合う。
- ・ 思考・判断する場面で、書く活動を積極的に取り入れる。
- ・ 思考・判断したことを表現する活動（話す・書く・描く・演奏する・歌う・発表する等）を工夫する。

(2) 検証計画

① 評価について

評価にあたっては、目標と児童生徒の表れを照らし合わせて評価する。児童生徒の思考・判断のプロセスの結果、表現されたものを見て、児童生徒がどのように思考し・判断したのかというプロセスを正しく見取り、その見取ったことを授業改善に役立てる。

(3) 研修体制

① 研修単位・内容・指導案

- ・ 研修単位→低学年・中学年・高学年・中学部を2つに分けた各ブロックを単位とする。
- ・ 研修内容→小・中学部共に、各教科の授業を行う（得意を活かす）。
- ・ 指導案→全体研修は細案、公開授業は略案（A4で両面1枚、単元目標、単元の流れを含む）。
- ・ 夏季研修会、1月末の全体説明会において、研修成果物をブロックごと紹介しあう。

その他

- ・ L G B Tへの理解を図る授業（道徳または学活）を各学級で年間1本は行う。
- ・ L G B Tについての研修→新派遣者を対象に夏季研修会で行う。
- ・ L G B T研修の系統表を活用する。

② 全体研修授業

- ・ 全体研修授業は教科の授業を1学期に中学部、2学期に小学部で行い、年間2本とする。
- ・ 事前研修会では、本研修が目指す「主体的に取り組む中で、他と協働しながら深く学び合う児童生徒」がどのようにしたら育つのか、目標や活動・手立て・評価方法について互いにアイデアを出し合う。
- ・ 授業参観時、見取る児童生徒をブロックごと分担し、児童生徒の思考のプロセスをよく見取る。
- ・ 授業参観時、ブロックごと1人10分間程、ローテーションで自習体制を見回る。職員室に1人、小学部の各フロア2人、家庭科室棟に1人、中学部棟に1人の計5人で見回り、児童生徒の安全を確保する。
- ・ 事後研修会では、その検証として、目標に沿ってそれぞれの教員が見取った児童生徒の思考・判断のプロセスの過程を出し合い、目標が達成できたのかどうかを児童生徒の表れから話し合う。授業事後研修会は、ワークショップ形式で行う。

③ 公開授業

- ・ 公開授業は、1学期末（6月）から2学期中（11月末まで）に小・中学部共に各教科の授業を行う。
- ・ 公開授業内容→教科（道徳を含む）で1人1本行う。

④ 事後研修会シートの活用

事後研修会シートを活用することで、授業を参観するポイントを共有する。また、参観者はシートに記入後、授業者へ提出し、授業者へのフィードバックとする。

事後研修会シート

名前（ ）

視点1：目標は達成されたか。（価値に迫ることができたか。児童生徒の姿から検討。）

視点2：目標を達成するための研修の手立ては有効であったか。

（有効でなかった場合、代わりにどんな手立てが考えられるか。）

その他：